医学中央雑誌

—その書誌的分析—

特集：医学中央雑誌

関 口 昌 樹*

堀 敬 三**

内 容

- I. 序 論
- II. 刊行状況 (昭和 41 年下半期)
- III. 収録文献の分類と収載順序
- IV. 構成各部の検討
 - A. 本 誌
 - B. 索 引
 - C. 収載誌目録
- V. 結 語

I. 序 論

今より 10 年前、昭和 32 年 8 月に共立薬科大学に於て開催された第 2 回医学薬学図書館講習会の科目中、参考文献解説の医学側テーマとして医学中央雑誌 (以下 IC と略す) が選ばれ、日大の堀敬三氏が解説を担当した。この時堀氏が作成した教材 (B 5 判, 14 頁、謄写印刷) は、周到綿密な調査によって得られた資料と明快な解説の故に、講習会シラバス中の白眉と評された。特に IC の書誌的乃至図書館実務の解説は、当時はもとよりその後も殆ど現れていない為、この教材は得難い資料として今日まで重用されて来た。一方筆者は昭和 36 年より数年間、文部省図書館職員養成所 (現図書館短期大学) に於て医学文献解説を担当したが、こと IC に関しては堀氏の教材より受けた恩恵は頗る大であった。

今回編集部より IC に関する特集集中、書誌的解説の担当を命ぜられたが、その際堀氏の教材を中心資料とすべき旨特に指示された。仍て本稿に於ては、上記教材の構成をそのま

ま継承し、各項目中の主な記載を IC の現状と比較検討して追補訂正を行った上、筆者の養成所講義原稿その他より歴史的記述等を若干加え、責をふさぐこととしたい。

II. 刊行状況 (昭和 41 年下半期)

先づ IC 刊行の近況を昨年 7~12 月について調査し、その結果をまとめたのが表 1 である。項目、体裁等は教材の冒頭に掲載された表を踏襲している故、両者を対比すれば 10 年間の推移が自ら明らかとなるであろう。(表 1 参照)

III. 収録文献の分類と収載順序

表 2 に示す如く 5 グループ 23 科目に分類して収録されるが、実際はある程度の量に達した部門をのせている為、毎号全科目を収載する訳ではなく、又ある号が特定のグループ丈で占められることもない。なお各グループ内は常に別表の順で掲載されるが、ある号内でのグループ順は、グループ V を最後におくこと以外別に定まっていない。この掲載順位は特定の科目について未製本のものを多数検索する際など便利であろう。(表 2 参照)

IV. 構成各部の検討

A 本 誌

(1) 本 文

1. 分類科目及び細目

毎号の表紙にその号の掲載科目一覧が印刷されて居り、各科目名の次にその科目の最初の二つの論文の著者名を括弧に入れて記載してある。本文中の各科目の初めにはその科目の分類項目全部を印刷した表をつけ、その号

* Masaki SEKIGUCHI 慶大北里記念医学図書館

** Keizo HORI 日本大学医学部図書館

に含まれている項目に掲載頁をつける。毎頁上部欄外には科目、項目及びその科目のその巻の通し頁が印刷されている。

このように一つの号の中では各科目は劃然と区切られているが、1科目内では1頁に2又はそれ以上の項目が掲載されることが多い。従って科目別にまとめる場合は、各項目の掲載巻頁を示す簡単な索引を作る必要がある。IC発行の外科・整形外科・放射線科その他各科別の中央雑誌が殆ど休止状態にあり、且つICの索引が本誌完結から1年以上遅れている現在、ICを2部又はそれ以上重複備付けしている所では、その1部をこのように分けることは利用者にとって便宜を与えるであろう。但しこの場合人名、件名索引がない為適及的、網羅的検索には適さないが、上記の項目索引でもあれば、特定項目について簡単に調べることは出来るであろう。

2. 巻次及び通し頁数 上部ノンブル

3. 各号頁数 下部ノンブル

4. 標題 ゴチック 標題中の外来語は原報記載形式の如何を問わず原則として総て原綴りで記載。(アミノ酸……Amino 酸, エステル……ester) 但し略名で表し得るものは逆に省略形に統一している例もある。(Vitamin E……V. E.)

5. 論文形式 原報が学会講演要旨又は抄録の場合は「会報」扱いとし、論題の後に(会)と記入。但し索引にはこの表示がない。

6. 内容国語 原報が欧文で書かれているものは、総て論題を邦訳しその後に(英文)、(独文)と記入。

7. 著者 多数著者でも本文では省略せず全員記載する。(索引では最初の3名まで)

8. 所属 著者の次に括弧に入れて示す。原報に記載のない場合括弧内はblank。なお機関名の省略法は概ね次の通りである。

(1) 大学

イ. 医学関係 原則として2字で表す。従って医学外で類似した大学名と混同しないよう注意が肝要(特に生物、化学等関連領域を主題とする論文の場合)。たとえば和、関大は夫々和歌山医大及び関西医大の略で、和

歌山大学、関西大学ではない。2字で区別出来ない場合は3字とする。(東北大、東邦大)

ロ. 医学以外、学部又は専門科目を入れる為少々長くなる。(京都薬大、九大理)

(2) 大学以外の機関 概して詳細であるが特定のものはかなり省略。(国立衛生試験所……衛試、国立東京第一病院……国立東一)

9. 掲載誌名 一切省略せず。国内雑誌名省略の可否は従来関係者の間で問題点の一つとされ、未だ意見の一致を見ていない。スペースの制限の厳しいICが敢て完全記入を実行しているのは、確かに一見識と言うべきではなからうか。(余談であるが、国立国会図書館編集の雑誌記事索引では、医学雑誌名の記入に当協会の「日本医学雑誌略名表」を全面的に使用しており、之とICとの比較検討は本問題の研究上資する所少なくないと思われる。)

10. 巻号及び頁数 巻次をゴチック、次に号数を括弧に入れて平活字で示し、その後原報掲載頁の始めと終りを記入する。因みにICは創刊以来初頁のみ記入する方法をとって来たが、原報日付で昭和36年1月分かな現在の形に改められたもので、この形式は167巻(昭和36.8-9)あたりから散見する。この変更は利用者の多年の要望に応えたもので、印刷形式上の一進歩と称すべきであろうが、その半面戦前からの伝統を守って頁を示す活字を極端に小型化しているのは、スペース節約の為とは言え些か疑問とせざるを得ない。索引、抄録等二次資料における原報掲載頁の表示は、文献の検索又は引用上極めて重要なもので、之を余りに小さくすると単に見にくい丈でなく、紙面が古くなったり汚れた場合、見落しや見誤りの原因ともなり兼ねない。この点再検討を要望して置き度い。

11. 刊年 之も以前は日本の年号及び和数字を使用し、(昭和二十七年五月)の如く記入していたが、165巻(昭36)より西暦及びアラビア数字に改められ、(1966.4)と著しく簡潔になった。

注：編集の際、収載予定の論文が同時に2誌以上に発表されているのを発見した場合は、掲載誌名、

巻号, 頁数を併記している。

12. 抄録添付の基準と表示 会報, 簡単な症例報告, 薬剤使用経験及び社会医学関係のものには抄録をつけぬことが多い。しかもこの場合索引には「抄録なし」の表示がない為, 抄録を目当てに探している利用者は時として甚だ不便を感じる。散々骨を折って漸く目指す文献を探し当てた所論題丈だったという様な経験を持たれた読者も少なくないのではないか。

13. 抄録者名 編集部に於て抄録を作成した場合及び抄録の末尾が行の終りで, 抄録者名を入れる為に行を変えねばならぬ場合は省略。(スペース節約の為か)

14. 前報注記 2 回以上連続して発表される論文に対しては, 論題の次に順序を表すアラビア数字を括弧に入れて記入。(平活字) 更に参照の便宜の為, 前報の IC 掲載巻及び頁を次の形式で注記。例 [(4) 本誌 158 巻 584 頁]

この前報注記は IC では戦前から行われていたものであるが, 世界各国の二次資料でも恐らく余り例を見ないのではないか。連続発表の場合, 前報参照を必要とすることが多いのは当然と思われるが, スペースに制限される抄録では, たとえ原文には前報について述べられていても省くのが普通であるから, この注記は誠に重要且つ適切なサービスと言わべきであろう。

(2) 付録的なもの

a. 腫瘍学

206 巻 1 号 (昭 40.5) より毎号本文末尾と最新文献との間に掲載。内容は 204 巻以降の IC 収録文献中より腫瘍関係を抜萃した 1 種の記事索引。排列は本文のグループ別とは関係なく, 腫瘍一般, 同治療, 消化器, 腹部等何れかと言えば件名的な項目が多い。上部ノンブルに 1 頁内の項目を列記し, 腫瘍学としてのその巻の通し頁をつけている所は, 本文中の 1 科目のそれと全く同じである。記入も抄録がない点を除き本文記載事項と同一であるが, 最後に本文収載巻, 頁及びその科目をつけてある。例 [219-637] [婦]

腫瘍学としての索引はないが, 対象が限られている上, 上記の如く件名的に分けられて居り, 又量的にも左程多くない故 (1 巻 25 頁前後) 数巻分通覧も容易であること等の理由から, 文献探索の好資料として盛に利用されている。

b. 最新文献

主要誌の最近号の目次 (主要記事のみ) を一つの section にまとめ毎号末尾に掲載。戦後久しく途絶えていたが 111 巻 1 号 (昭 29.8) より再開された。記入形式は戦前と殆ど変っていない。本文との主な相違点は次の通りである。

1. 著者は最初の 1 人丈を挙げ, 2 人目以下は ~ として省略する。
2. 収録誌中の各論文の掲載頁は全然出さない。
3. 同一号内の連続報告は主標題に続けて (1)……(2)……と追いつみにしている。

なお各号の収録誌の掲載順序は表紙記載の分類順であるが, 総合誌は常に最後に置かれる。

柱に最新文献 () として括弧内にその巻での最新文献の通し頁, 各号初頁に昭和四十一年一月分 (之丈は普通りの純日本式) と入れ, 下段ノンブルにその号の本文の最終頁に続く頁数をつけている。

以上によって明らかな如く, 最新文献は製本の際本文から切離すのが適当であろう。「主要誌」に制限していること, 各誌の中では原著等最も重要なもののみにしぼっていること, 各論文の掲載頁がないこと等の理由から全く速報的価値しかなく, Current List of Medical Literature や Current Contents の如く後日の使用に堪えるとは思われないが故である。(目次に「最新文献各号末尾」と刷り込んであるが)

ここで IC 製本時の注意について一言触れておくのも強ち無益ではないであろう。之は抄録誌一般に共通した点であるが, 収載量を少しでもふやそうとして頁一杯に版面をとる為, 余白の極めて乏しいものが多い。従って初回製本の際, 小口裁ち揃えを慎重にし, 深

く切り過ぎぬ様指示しないと、次の修理再製本の際本文印刷面を裁たれる恐れがある。特に索引で掲載頁の部分の切られては殆ど無価値に等しいものとなろう。

B. 索引

前記の如く、人名、物件共に原報の形式(原著か会報か)及び IC 本文における抄録の有無を全然表示していない。図書館員が利用する場合は勿論、利用者に対し IC の使い方を指導する時はこの点を特に注意する必要がある。

なお IC では索引に関する説明、使用上の注意等を一切行わない(少くとも索引にはつけられていない)為、以下の記述中 IC 編集部の意図、方針に対する筆者の認識不足乃至誤解の点もあると思われる。読者の御寛容を予めお願いする次第である。

(1) 本文

1) 人名

先づ外国人名を各字部の先頭に一括する。原綴りと片仮名とあるが、後者は編集部で原綴りを確かめ得なかったもの(殆ど特許公告)で排列は両者一本の五十音順で行う。原綴りの各字部へのはめ込みは現行の方法ではなく、古い表記法に基いている。(Fa…ファ Vi…ウィ、但し L は仮名文字では表せない為全部ラ行)

次に漢字名は音順と字画数順を交互に組み合わせたいわば電話帳式の方法をとっている。即ち先づ姓を表音化して五十音順に排列し、同音姓の間は字画の少い方を先に出す。同姓の人の間には名の五十音順。同音なら字画順と姓の場合と同じ方法をくり返す。但し同音姓で字画が少い為先に出た場合、その字の次に別の字(同じ字でもよい訳だが)がつく姓が幾つかあれば之等を全部出し、その後に字画の多い為後廻しになった第二の同音姓が出る。(例…牧, 牧田, 牧野, 横)従って姓を表音化して並べた排列とは異なるのが当然で、之は電話帳の例を引くまでもなく周知のことであろう。又各頁上部ノンブルにその頁に含まれている総ての字(仮名を含む)を出

すやり方も電話帳そのままである。(130 巻(昭 32)より実施)唯、電話帳では同字の姓で読み方が違うと夫々の字部に出しているが、IC では一ヵ所に統一し、別の読み方から参照する。たとえば大藤は「オオフジ」、「ダイトウ」と 2 種の読み方があり、電話帳では「オ」「タ」双方に出ているが、IC では「オ」に統一し「タ」から参照している。

件名注記 人名索引に載せられた各人名の次に、その論文につけられた件名中最も重要なものの一つを選んで括弧に入れて付記するもの。IC では戦前から行って来たが 172 巻(昭 37)以後之を廃し、同一人で二つ以上論文がある場合でも単に掲載頁を列記するのみとなった。従って求める論文がその中のどれであるかは一々本文を見なければ分らず、又同名異人の区別も出来ない。(以前は件名の内容が余りかけ離れていれば別人と分り、又自分の求める主題と全然違っていれば直ぐ気がついた。)1 文献 1 件名では主観の相違から誤解を招く恐れがある点もさることながら、人手やスペースなど編集集率向上が件名注記廃止の主な原因と思われ、激増する文献処理と索引刊行速度維持の為やむを得ないこととは言え、利用者に対するサービスの面では大きな後退と言わざるを得ず、惜しまれる所である。

2) 物件

イ. 構成 外国語、日本語の 2 部より成る。前者は外国語を原綴りで表したもので、外国語を日本化(片仮名書き)したものは後者に含まれる。(疾患名に多い。ジフテリア, リウマチ)但し之は極めて少く、反対に今日殆んど日常語(医学以外の一般社会に於ても)化している様な外国語(例…アレルギー, ビタミン)まで、総て原綴りに直して外国語の方に入れている。又中には原綴りで外国語に入れておき、参照で邦訳の方へ導くものもある。(例…Neurose→神経症)

ロ. 排列

外国語 ABC 順。化合物名の頭の数字, α , β , γ 等は無視。略語(DNA 等)は別扱いにせず、一般語の間に入れる。

日本語 五十音順。但し片仮名のもの（外国語の日本化及び動植物名（日本語））は一括して各字部の先頭におく。化合物名の頭の数字は排列に入れる。（例…一酸化炭素→イ）

同音のものは物質，診断，疾患の順。濁音は常に最後。ある見出し語を首字とする複合語がある時はそれをまとめ，その後へ次の同音語を続ける。（人名索引の場合と同じ）

ハ. 索引語

IC の物件索引は，論題中より主要語を抽出し，之を種々な順序で並べる Keyword index を主体とし，之に内容から論題に現れない主要語を抽出する通常の件名索引の方法が加味されている。索引された各文献の主要語群，主要語「A」を共有するものは，「A」が見出し語となった場合，下記の如く種々な形で表わされる。

A (山田)	292	
_____		①

_____ B		②
C _____		
D _____ E		
_____ F-G		③
_____ H, I		

①は「A」のみを含み，②は「A」が他の主要語「B，C，D，E」と前，後或いは中間で結合し複合語の形をとり得るもの，又③は「F」「G」間及び「H」，「I」間に「並びに」「又は」「に対する（影響）」等の論理的関係のあることを示すものである。

ニ その他 各文献には必ず最初の著者名（姓のみ）を括弧に入れて記入。2人目以下は，～で省略。最後に本誌掲載頁をつける。

物件索引には上記の他，日本語と外国語（外来語），索引語間の相互参照，シソーラス，文献重出決定の基準等数多くの問題点が含まれているが，本稿の範囲外に及ぶ面が多い故割愛する。

（2）付録的なもの

1) 難訓姓氏一覧 各巻の扉の下部に刷り込まれている。戦前からあったもので，戦後

も最初の 89 巻（昭 21-24）より復活した。ここに出るのは総てその巻の収録文献中から抜萃したもの。従って同一の姓が数巻に亘って連続掲載される場合も稀ではない。又上記から明らかな通り，この一覧で示されている読み方は，あくまでその巻の収録文献の著者に限るもので，ある文字が常にそのように読むと速断してはならない。（例…206 巻の一覧に「間」という字に対しハザマと訓してあるが，之をアイダと読む苗字もある）利用上この点は特に注意する必要がある。

2) 正誤表 之も 1) と殆ど同時に発足し，戦後の復活も 1) と同じ 89 巻であった。

毎号の正誤すべき箇所をまとめてその巻の索引に添付するという方法で出されているが，之は些か問題ではないであろうか。表 1 に見る如く，索引号の刊行は現在本誌完結より 1 年以上遅れている。最近多少この差は縮められつつあり，編集部も索引刊行の迅速化に一層努力される由であるが，索引形式に根本的な変革が行われぬ限り，大幅な短縮は望めそうもない。とすれば読者は約 1 年間誤りを知らされずに利用しなければならないことになる。特に薬品の数量とか化学記号が違っていった場合など，相当な被害者が出る可能性もあるのではないか。堀氏がシラバス中で述べられた如く，正誤表の別紙添布，中刷り込み，別号添付等は紛失，見落しの危険が多く，その点から見れば IC の方法は確かに安全確実と言えるであろう。然し，資料管理の立場から離れ，前記の利用者への影響という面から見て，果してこのままでよいであろうか。正誤表を見る度に考えさせられるのである。

C. 収載誌目録

年刊。大体毎年 9～11 月頃に調査して年末に刊行。昭和 32 年版までは索引号の末尾に合綴されていた。内容は欧文，邦文の 2 本立て，欧文は ABC 順，邦文は五十音順。戦前より昭和 25 年版までは誌名を記載した上で参照もない簡単なものであったが，昭和 29 年版からは刊行頻度，発行所，同所在地等を記入し，又僅かながら参照もつけられてある。

本目録を概観すると、誌名記入特に団体名の記入に多少問題があり、刊行頻度や改題に訂正もれと思われる例が時々あり、更に欧文、邦文の区別には疑問を抱かせられるが、一面発行所及び所在地は概して詳細且つ正確で、特に学会誌など発行所の他編集所の名称及びその置かれている機関を部局名まで詳しく記入されている為、誌名丈では分らぬ内容もある程度推定し得る場合が少くない。(例…核医学 発行所 日本核医学会 東大上田内科教室、脈管学 発行所 日本ヘキスト株式会社 編集所 日本脈管学会 東大第一外科教室)之は本目録の有益な使い方の一つと言えよう。又現在収録中のもの許りでなく、1962 年 10 月末以降休・廃刊のものも含めている。終りに戦後の収載誌数の推移をまとめて御参考に供し度い。(表 3 参照)

V. 結 語

以上 IC の構成各部についてその現況を書誌的方面から若干の検討を試みたが、何分にも本邦唯一の網羅的医学抄録誌として 60 余年の伝統の中に極めてユニークな発展ぶりを示した同誌の全貌を把握することは容易な業ではなく、加うるに筆者の浅学非才の為誠に不十分な成果に終わった。過去の記録が乏しい上、IC 現品の調査に当り最も重要な書誌的データを提供する多くのものが製本の際除かれてしまっていることも大きな障害で、その為本稿中推定によって補った個所もある。更に筆者の独断や誤解も少くないと思われる。今後機会を与えられれば之等の訂正を行いたいと願っているが、読者諸賢の御叱正を衷心切望する次第である。

* * *

<表 2> 科目一覧

グループ	科 目	分類項目	細目
I	生 理 学	20	
	生 化 学	13	
	薬 理 学	17	
	薬 学	17	
	解 剖 学	18	
	病 理 解 剖 学	19	
II	衛 生 学	24	
	細 菌 学	21	
	血 清 学	11	
	法 医 学	6	
III	精 神 病 学	15	
	内 科 学	21	
	小 児 科 学	23	
	理 学 的 療 法 学	8	19
IV	外 科 学	19	6
	整 形 外 科 学	14	
	眼 科 学	21	
	耳 鼻 咽 喉 科 学	15	
	産 婦 人 科 学	28	
	皮 泌 性 病 学		
	皮 膚 科 学	12	
	泌 尿 器 学	11	
	性 器 学	8	
	性 病 学	4	
V	齒 科 口 腔 外 科 学	17	14
	医 史 学, 社 会 医 学	2	
	獸 医 学	6	

<表 3> 戦後 IC 収載誌数の推移

収載誌目録の合綴 された索引の巻	調査日	邦文誌	欧文誌	計
	年 月			
96巻 (昭26)	昭25 12	304	12	316
106" (" 28)	29 7	422	40	462
117" (" 30)	30 9	508	62	570
124" (" 31)	31 11	571	66	637
131" (" 32)	32 12	618	75	703
之より独立の印刷物	33 9	672	81	753
	36 10	875	106	981
	38 8	960	114	1,074
	40 9	1,018	118	1,136
	41 9	1,041	123	1,164

<表 1> 最近の刊行状況 217~221 卷 (昭 41. 7~12)

出版事項 構 成		卷 号 形 式	刊行時期及び回数	1 号の頁数 () 内は 1 巻の総頁数	備 考
本 誌	本 文	① 6 号を以て 1 巻、 年 10 巻 ② 各巻の完結号には 終冊と付記 ③ 臨時増刊 最近滞貨処理の 為の臨増はなく索 引号のみ。	月 5 回 (1, 7, 13 19, 25 日) 発行	128~144 (726~798)	創刊: 明治 36 (1903) 発行所: 医学中央雑誌刊行会 編集: 初代 尼子四郎 (明 36~昭 5) 2 代 尼子富士郎 (昭 5~)
	腫 瘍 学	④ 巻号 刊行順索引 には号数なし ⑤ 通号 索引号を含 め総ての号につけ る。この場合索引 号も刊行順従って 本文の終冊の通号 とは続かない。	毎号本文の末尾 最新文献の前に合綴	4 ~ 6 (24~30)	206 巻 1 号 (昭 40. 5. 1) より 204 巻以降の収録文献 中より抜萃
	最 新 文 献		毎号の最後に掲載	4 ~ 12 (24~38)	111 巻 1 号 (昭 29. 8. 10) より復活 内容 昭和 29 年 5 ~ 6 月分より
			本誌終冊刊行より 13. 5~14 ヶ月後に刊 行 昭和 41 年 1 ~ 12 月中 に 9 巻分 (202~210 巻) 刊行	27~31 欧 23~29 和 53~61	各号別の通し頁には入る。 通号として別頁
索 引	本 人 名			27~31	本文計 104~117
	文 物 件			欧 23~29 和 53~61	
	附 録	難 訓 姓 氏 一 覧 正 誤 表	索引号の扉の下半分 に印刷 「難訓」と索引本文 との間	頁なし 3 ~ 5	
附 録	収載誌目録		年刊。 昭和 41 年版は 9 月末 現在で 12 月末に刊行 (昭和 40 年も略同じ)	和 32 欧 8	昭和 25 年より復活 昭和 32 年まで索引号 の付録 以後独立の冊子となる 昭 41. 9 和 1, 041 欧 123 計 1, 164